

小宮山 悟著 Satou Komiyama

天才なのに消える人
凡才だけど生き残る人

Forest
2545
Shinsyo

はじめに

天才や怪物がいる世界で学んだこと

2009年10月6日、千葉マリンスタージアム。

激しい雨のなか、2万6000人もファンに見守られ私が最後のマウンドに立ってから、3年近くが過ぎました。

千葉ロッテマリンスターズがまだロッテオリオンズだった1989年秋にドラフト1位指名されてから20年。44歳になるまでプロ野球のユニフォームを着ることができるとは、自分でも想像できませんでした。

高校時代、私が所属していたのは創立2年目の新設校の野球部で、「甲子園に行きたい」とは誰も言わないチームでした。

甲子園が遠い場所であることを全員が知っていて、甲子園に行けるとも、行きたいとも考えたことはありません。

もちろん、私もそのひとり。「プロ野球選手になる」ことなど考えもしませんでした。

高校時代、「早稲田大学で野球をやりたい」と心に決めたものの、高校三年で受験に失敗、一浪してもダメ。3度目の挑戦でやっと早稲田大学に入ることが許されました。

費やした時間は2年。憧れの早稲田大学野球部に入部したときには20歳になっていました。

早稲田大学野球部で「精神野球」を徹底的に叩き込まれ、通算20勝をマーク。ドラフト1位でロッテオリオンズに入団しましたが、プロ野球ではアマチュア時代の成績などまったく関係ありません。

プロ入りしたときにはもう24歳。

プロ野球で着々と実績を残し、スターの地位を確かなものにしていく同い歳どの選手はたくさんいました。自分で望んだこととはいえ、プロ野球選手として遠回りしたことは否めません。

しかも、プロ野球の選手たちはみんな、才能を持っています。野球の才能がなければこの世界に入ってくることはできません。

高校や大学、社会人で数々の栄光をつかみ、実力が認められた選手だけが戦うことが許される場所なのです。

私はプロ野球の世界で、**天才**や**怪物**を見てきました。**天分**という言葉がまさにぴったりの選手は数え切れないほどたくさんいます。

しかし、才能を持った人でも成功をつかむことが難しいのがプロの世界なのです。どうすれば、プロ野球で生き残れるのか？

いきなりぶつかったのはその問いです。

残念ながら、私の野球の才能は、**天才**や**怪物**に比べると豊かなものではありません。むしろ、乏しいと言ったほうがいくらい。

同じチームでプレイした伊良部秀輝投手のように158キロの剛速球を投げることはできません。

野茂英雄投手のフォークボールのような魔球を持っているわけでもありません。

でも、何か方法はあるはずだと考えました。

「24時間」は誰にでも平等に与えられている

「才能は誰にでもあるわけではないけれど、時間は平等にみんなに与えられている」と気づ

いたのです。一日24時間。それをどのように使うかによって、「答え」が変わるのではないかと思います。私は24時間をすべて、野球に注ぎ込むことに決めました。「24時間を有効に使えるかどうか」でおそらくすべてが決まるだろうと考えました。

現役時代、常に感じていたのが「時間が足りないな」ということ。

一日は24時間しかない。いつも、「もっと時間をつくらなければ」と思っていました。プロ野球は、1チームがそれぞれ1年間に150試合近く戦います。オープン戦、プレーオフ、日本シリーズなどを加えると、それ以上。

全国、西から東まで、北から南まで移動しながら戦うシーズン中は、とにかく忙しい。私は、週に1回登板するローテーションピッチャーとして起用されていましたが、登板日以外もやるべきことがいくらかもあります。実際にユニフォームを着てトレーニングをする時間はそんなに長くありませんが、ビデオを見たりデータを確認したり、ウェイトトレーニングをしたり。そんな日々でも、私はいつも寝る前に、「今日は何をやっていたのか?」と振り返る時間を持つようにしていました。その日のことを真剣に考える時間を必ずつくることを自分に課しました。

反省すべきことがあれば、翌日は反省を踏まえて行動する。基本的には失敗の繰り返し。「ああすればよかった」「こうすればよかった」と思うことばかり。

完璧な一日などありません。

だから、「明日こそ、こうしよう」と考えると、いろいろな欲が湧いてくるのです。私はその欲が人よりも強かったのかもしれない。

一日を振り返る時間を「次の日をより充実した一日にするための貴重な時間」と位置づけました。

私は20年にわたって、野球を職業とするプロ野球選手として働いてきました。

「野球の才能があるとは決して思っていない」と言ったのは本心です。

だからこそ、時間のある限り、野球のこと、投げることについて考え続けました。

野球の才能は乏しかったけれど、ボールを投げるのが本当に好きで、「投げることにについて考える才能」は、おそらく人より秀でていたと思っています。

小さな「違い」がとてつもない「差」を生む

私のストレートは140キロをやっと超える程度。これは日本プロ野球界ではアベレージ以下。バッターがびっくりするような変化球もありません。

だからこそ、平均以下のボールをどのように使えば、バッターを打ち取ることができるのかを徹底的に考えました。

四六時中、肌身離さずボールを持って、どうすれば変化球が曲がるのか、バッターはどんな球が打ちにくいのかを考え、ピッチングと向き合いました。

「明日はこうやってみよう」と毎日考えながら生活していたのです。

これが才能のない人間の生きる道。

そう、私は思いました。

とにかく必死、毎日が真剣勝負だったのです。

一日24時間をどうやって使うのか。一日一日は小さな「違い」かもしれませんが、積み重なると、とてつもない「差」になるのです。

何かを必死になってやることの難しさは、もちろん、誰もがわかっているでしょう。自分が必死になって取り組んでいることがまわりに伝わるくらい必死になれば本物だと言えると思います。

「毎日を一生懸命に」と、いろいろな人がよく言います。一生懸命やることはもちろんすば

らしい。でも、「この一生懸命って何なのだろう」と考えました。

一生懸命やるのが非日常であってはならないのです。一生懸命に打ち込むことが日常になれば、毎日血のにじむような努力をしても、それは日常なので、どうと言うことはない。たまに一生懸命やるから、「非日常の一生懸命」をしたことで、その時点で満足してしまうのです。

「オレは今日、一生懸命やったんだ」という気持ちになったら、それが墮落の始まり。毎日毎日、とにかく必死になって一生懸命やること。その一生懸命が毎日続けば、一生懸命ではなくなります。

「一生懸命を一生懸命だと感じないくらいにならないといけない」と、早稲田大学野球部時代の監督である恩師・石井連藏さんに言われて、「そうか!」と思ったものです。

努力も同じです。

「努力しているぞ」と思っている間はダメ。

努力を努力だと感じなくなると、それが日常になって初めて一人前だと考えていました。そういう思いを常に持ち続けたおかげで、44歳になるまでボールを投げ続けられたのだと

思います。

プロ野球でマークした勝利は117。

メジャーリーグでもプレイすることができました。

「プロ野球で経験しておきたかったことはもう何もない」と胸を張って言えるほど充実した現役生活を送ることができたのは、「24時間の使い方」が正しかったからでしょう。

18年間のプロ野球、1年間のメジャーリーグで、さまざまな選手を見てきました。

才能に恵まれながら姿を消した人。

特別な何かを持っていないのにしぶとく生き残った人。

才能を存分に活かして頂点を極めた人。

私がこの目で見えた人々についてお話ししたいと思います。

はじめに

3

- 「天才」や「怪物」がいる世界で学んだこと
- 「24時間」は誰にでも平等に与えられている
- 小さな「違い」がとてつもない「差」を生む



第1章 天才は「できない人」から学ぶ

17

- 「才能」には1億円以上の価値がある
- ダルビッシュが大成できた理由
- 「できない人」から何かを学ぶ
- 才能に溺れることなく努力を続けるのは難しい
- ダルビッシュとイチローの共通点
- 「足りない」と自覚することが次へのステップ
- 才能を比べるだけでは勝負は決まらない
- 「才能」は活かさなければ意味がない
- 「才能の塊」と戦ってどう勝負するか？

第2章 「大丈夫」という言葉の尻に引っかかるな

39

- 目標を決めても何もしなかった高校時代
- 天才にはどうやっても太刀打ちできない
- 根拠なく、「なんとかなる」と思っていた浪人時代

第3章 「理不尽」のなかから真実を見つける

51

- 20歳で新しい野球人生をスタート
- 憧れの野球部に入部するときを立てた目標
- 絶対服従の曰々に学んだこと
- 二年の秋の早慶戦で夢がかなった
- 味わって初めてわかる「鬼」の恐ろしさ
- 石井監督の厳しさの裏にある教え
- 大学4年間で人間的に強くなれた

第4章 「5年後の自分」をイメージする

79

- 目標をひとつずつ達成して次の目標へ
- 大人扱いされたことで芽生えた自覚
- 甘えを吹き飛ばしてくれた牛島和彦投手の言葉
- 「牛島教室」で学んだブロの心構え
- 「最終的にどこを指すか」で結果が変わる
- 5年かけて「5年後の自分」をつくりあげる
- 1年目が終わって考えた、「何を変えて、何を変えないか」
- 投げるのが仕事だから、最後まで投げる

第5章 意見が対立したら徹底的にやり合う

101

- 故障したことで考え方が変化
- とことん意見をぶつけて答えを探す
- 1年間コンスタントに投げるための調整方法
- 埋まらなかった野球に対する考え方の違い
- 勝つことでわかった「チームワークとは何か?」

第6章 どのデータを捨てて、何を残すのか

119

- 映像は嘘をつかない
- データを過信すると危ない
- 投手の喜びを感じたイチローとの対戦
- 自分でも「ありえない」と思ったヒッチング
- 悪夢の18連敗“から学んだこと”
- 「勝つ気はあるのか」と球団に問いただした白
- 新しい喜びを味わえた横浜での2年間
- 衰えを自覚して自分の生きる道を探す
- 「最後の1年」はホビーとメッツで

第7章 「なぜ?」を持たない人間は伸びない

157

- どの球団からもオファーがなく浪人に
- 早稲田の後輩相手に知った、教えることの難しさ
- 映像こそが最高の教科書
- バレンタイン監督とまた一緒にプレイを
- 恐ろしいほどにはまった“ホビー・マジック”
- 胸上げのあとに感じた怒り
- ひとつのピースとして何ができるのか

第8章 プライドよりも好奇心

181

- 大学院の試験を受けてから日本シリーズに
- 「当たり前のこと」を学び直す
- 「それ、やってみよう」という探究心
- 知識があれば別の見方ができる
- プライドが何かの邪魔をする

第9章 組織のために何ができるのか？

195

- チームに貢献しない個人成績は意味がない
- 組織に貢献できる人、できない人
- 才能だけで食えない人はどうすべきか？
- 日本代表は究極のプロジェクトチーム
- あの人はなぜ「センスがいい」と言われるのか？
- 才能以上に大切なものがある

おわりに

213

- 「化ける」きっかけはそこからじゆうに転がっている
- 才能とは違うところの差がつく
- 「答え」が次の「なぜ？」をつれてくる